



『宇宙を旅する生命 —フレッド・ホイルと歩んだ40年—』 チャンドラ・ウィックラマシング 著 (恒星社厚生閣, 定価 [本体価格 2500 円+税])

矢治健太郎 (核融合科学研究所)

「地球の生命は彗星によってもたらされた」という話はよく耳にする学説である。これは「パンスペルミア仮説」としてよく知られ、著者のチャンドラ・ウィックラマシングとフレッド・ホイルは、長らくその「生命地球外起源説」を主張し続けてきた研究者である。本書の前にも「彗星パンスペルミア」を出版している。

フレッド・ホイル(1995~2001)といえ、定常宇宙論を提唱し、ビッグバン宇宙論に真っ向対立したことで知られる、恒星の元素組成理論の先駆者としての業績もあるが、ホイルの共同研究者であるファウラーが1983年にノーベル物理学賞を受賞したときはその対象とならなかった。それは、ホイルが生命地球外起源を長らく主張してきたことや、その他にも多数な論争を引き起こしてきたことが影響を及ぼしたからだという人もいる。

さて、著者のチャンドラ・ウィックラマシングは、スリランカ出身の宇宙物理学者で、ケンブリッジ大学を経て、カーディフ大学・教授に務め、天文学科の学科長をしている。星間塵の組成が炭素が元になっていることを主張した先駆者であり、関係の論文をメジャーな論文誌に多数出版している。その意味では、決してとんでも研究者ではないと認識している。フレッド・ホイルとは、ケンブリッジ大学時代に知り合い、師弟関係というよりは、以来40年、共同研究者としてはもちろん、年の離れた友人として交流を続けてきた。そして、その星間塵の研究過程の中で、生命が地球外起源であることを見出し、長らく強

固に主張し続け、またホイルの業績を擁護し続けてきた。特に、彗星の中に細菌が存在し、それによって、地球に生命をもたらした「パンスペルミア仮説」については、星間塵の赤外線観測の結果を根拠に主張し続けている。インフルエンザも宇宙空間から降り注いだと主張しており、その証明のために、成層圏での気球実験を試みている。

また、その後、火星起源の隕石に生命の痕跡が発見されたこと、木星の衛星に生命が存在しうる環境が見つかったこと。さらに、最新の天文学の成果にも注目しており、例えば、ケプラー衛星による系外惑星の発見・観測は自分たちの研究結果へ裏付けをもたらすと大きく期待している。

さて、評者がこの本を読んでみようと思った動機は、フレッド・ホイルがどんな人物か知らなかったのも、この機会に知りたかった。また、ウィックラマシングが、どのような過程で「パンスペルミア仮説」を主張するに至ったか、興味があったからである。

今、アストロバイオロジーという分野が広く市民権を得られている現在、この「生命地球外起源説」は、どの程度評価されているのか、どれくらい信憑性があるのか。そして、ウィックラマシング自身も、われらこそは「アストロバイオロジー」の創始者と言っており、現在どのように彼自身が評価されているのか、大変興味がある。

アストロバイオロジーのことを書いた本が多数出版されている現在、この本も合わせて読んで見てはいかがだろう。